チッチの背中に乗って

工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チッチの背中に乗って

【Ｎコード】
Ｎ２１３８Ｅ

【作者名】
工場長

【あらすじ】
清一とその飼い犬チッチとの交流を描く物語●●こどもの日企画「ムーンチャイルド」作品です●●「ムーンチャイルド」（「」はいりません）で検索すると、他の企画作品も読めます

第一話

秋の風が枯葉を転がしていく中を一台の青いワゴン車が通り過ぎていく。その車はやがて、道の突き当たりにある一軒の青い屋根の家の前にたどり着いた。

車の側を三歳になる一頭のゴールデン・レトリバーが尻尾を振りながら左右に走る。薄茶色のその犬は主人の帰りを喜んでいるのだ。

「チッチー今帰ったよー。しばらく私がいなくて寂しかったー？」

後部座席から背が高くてショートヘアの黒髪の女性が降りてきて犬――チッチに話しかける。ピンクのワンピースを身に纏った女性は小さい赤ん坊を抱えていた。

初めて見る物体に興味を示したのか、チッチは立ち上がり赤ん坊の足を嗅ぐ。

「新しい家族だよ、チッチ。名前は清一（せいいち）、男の子だよ」

チッチは尻尾を振りながら赤ん坊――清一の足を舐め始めた。清一の足が激しく上下する。

「こらチッチ、清一がくすぐったがっているでしょ。舐めないの」

女性が優しく諭すとチッチは前足を下ろし伏せの姿勢をとった。残念そうに上目で清一の足を眺める。

「聞き訳がよくてよろしい。チッチはお利口さんね」

飼い犬の態度に満足した女性は清一を抱き抱えながら夫とともに家の中へ入っていった。チッチはその姿を伏せの姿勢のまま、頭だけを動かして追った。

「お義母（かあ）さん、今帰りました」

女性が玄関から声を上げると、廊下の奥から眼鏡をかけた白髪の女性――「ハツ」――が笑顔で現れた。

「まあまあ雫（しずく）さん、お帰りなさい。元気そうで安心したよ」

微笑を浮かべながら互いを見つめる二人の間に、穏やかな秋日が

差し込む。
「清一です。お義母さん、抱いてください」
雫はハツの胸元に清一を差し出した。義母は愛おしそうに清一を抱きしめる。
「あばば、あばば、いい子だねぇ。賢そうな顔をしているよこの子は。ささ、お祖父ちゃんやご先祖様にご挨拶しましょうね」
ハツは清一を抱きしめながら十畳もあるリビング兼キッチンを抜け、六畳の和室へと入っていった。和室には檜でできた仏壇がその木目の色を見せながら迎えていた。
ハツは仏壇の前に正座すると清一を膝の上に乗せた。そして仏壇を開け、両手を合わせる。
「お祖父さん、ご先祖様、この子が清一でございます。聖司（せいじ）と雫さんの子どもです。これからこの子を見守ってやってください。この子に幸せを与えてください」
清一は不思議そうに仏壇とそこに飾られている数枚の白黒写真を眺めていた。

第二話

清一二歳　チッチ五歳

歩くことを覚えた清一は家のあちこちを歩き回る。フローリングや畳の上はもちろん、昼寝をする父親（聖司）の背中や、母親（雫）がたたもうとしている洗濯物の上も歩く。そのたびに父親や母親から注意されるのだが、歩くことが楽しい清一にとってはそんなことは苦にならない。

家の庭もよく歩く。遠くに行かないようにその時は必ず家族の誰かが見ている。

庭を歩くとき、清一は必ず「チッチ、チッチ」とチッチの周りを何度も歩く。チッチはお座りの姿勢で尻尾を振ってそれに応える。

「チッチ、ベローン」

と、チッチの頬を強く引っ張ることもある。しかし普段大人しいチッチは怒ることなく、逆に清一の頬を舐めるのだった。

それはある雨の日のことだった。

清一はこの日も庭を歩いていた。祖母（ハツ）に黄色の合羽と長靴を買ってもらったのがよほど嬉しかったのだろう。水溜りだろうが、泥土だろうが気にせず時には飛び回ったりした。

「チッチも来ゆのー」

清一は犬小屋にいるチッチに呼びかける。しかしチッチは犬小屋の中で寝そべって清一を見るばかりで外へ出ようとはしない。

「チッチは清一みたいに合羽を着ていないから濡れるのが嫌なんだよ」

青い傘を差している父親が笑いながらチッチを見る。チッチ右耳を父親のほうに少し動かした。

「チッチが来ない、ダメー」

清一は犬小屋に入るとチッチの背中に乗った。チッチはゆっくりと清一の方を振り向いた。
「チッチ、動け、動け」
清一はチッチの頭を何度も押す。数分ほどしてチッチが清一を背中に乗せたままゆっくりと犬小屋から外へ出てきた。
「お、おい清一大丈夫か？」
父親が慌てて清一のところへ駆け寄るが、清一は父親の心配をよそに。
「チッチ、動いた。動いた」
と、チッチの背中にしっかりと掴みながら喜ぶのであった。清一から見るとチッチの背中は逞しいものに見えるのであろう。
「清一、チッチが重いって言っているだろう」
父親が清一をチッチから離す。
「やだー、チッチ乗ゆのー」
清一は膝下を上下に動かして抵抗するがそれも適わず、チッチはゆっくりと歩きながら犬小屋へ戻るのであった。
小屋へと戻ったチッチは全身を激しく震わせ自身の体についた雨水を振り飛ばす。
「チッチ、ごめんな」
父親は清一の代わりに謝り、「清一戻るぞ」と清一を抱えたまま家の中へと入っていった。チッチはその様子を小屋の中から視線を追って眺めていた。

「チッチと遊んだのー」
清一は合羽と濡れた靴下を脱ぐことなく玄関からリビングへと歩いていった。
「おやおや、清一ちゃん、合羽は脱がなくちゃだめよ」
祖母の注意も聞かずに、洗濯物をたたんでいる。母親のところへと向かう。清一は濡れた手で母親の腕を掴み
「ママ、チッチの上乗った。乗った」

と、飛び跳ねた。乾燥機から出たばかりの洗濯物の上で、当然合羽についた雨水泥水が洗濯物につく。
「清一、何やっているの！　そこをどきなさい！」
怒りに満ちた母親の声に清一は動きを止めた。洗濯物を踏む足に力がこもる。
「見なさい清一。洗濯物も床も汚れちゃっているでしょ、どうしてそんな格好で家の中を歩き回るの！　さっさとその合羽と靴下を脱ぎなさい！」
清一は怯えながらその場に座り込んだ。目から大粒の涙が零れ落ちる。
「清一、チッチと遊んだのー」

それからしばらくして清一の姿が消えた。家族三人で家中を探し回ったが清一は見つからない。日はすっかり落ち、雨が屋根を叩く音は激しく、風は窓に自らの体を強くぶつける。
「私がきつく叱ったばっかりに家を出て行ってしまったのかしら、どうしよう。洗濯物なんてまた洗えば済むのに」
母親は先ほど自分の言葉を悔いた。今にも泣き出しそうな顔をしている。
「雫は悪くないよ。玄関で合羽を脱がせなかった僕がいけないんだ」
父親は妻の右肩を優しく抱き寄せる。
「こんな嵐の中外にでていなけりゃいいんだけど……」
祖母は心配そうに窓の外を眺める。青いワゴン車が雨に打たれ続けている。
「清一はまだ小さいから外に出たとしてもそんなに遠くには出ていないと思うんだ。近所を一回りしてくる」
父親は上着を羽織玄関へと出て行った。
「まって、聖司。私も行く」
母親は上着を着ずにそのまま夫の後を追った。

「清一ー」
「清一ー、お母さんが悪かったから、もう怒ってないから、出てきてちょうだーい」
二人は手分けして町内中を探し回ったが清一の姿は見つからない。
この嵐の中で傘は気休めにも使えず、家の前で二人顔を会わせたときは頭の先から足の先まで水に浸かっていると言っていいほど濡れていた。
「こうなったら警察を呼ぶしかないな……」
「そうね……」
二人が落胆と絶望の表情を見せた頃、激しい風の中からかすかに何ものかの声が聞こえてきた。その声は小さく、遠慮がちに聞こえる。
「ねえ、何か聞こえてこない」
母親がまずその声に気がついた。当たりを見回す。
「なんだろう、何か吠えているような……」
「吠えている」という言葉が出た瞬間、二人の視線はチッチの犬小屋一点に向けられた。
「清一、いるの？」
おそるおそる二人は犬小屋の中を覗きこむ。
清一はそこにいた。黄色い合羽姿のままチッチの背中の上ですやすやと眠っていたのだ。
「チッチが清一を守ってくれたんだね」
父親が清一を抱きかかえる。その腕の中で清一は「チッチ……」と呟いた。

第三話

清一五歳　チッチ八歳

清一は暇をもてあましていた。積み木で家を建ててはそれを崩すのを何度も繰り返した。一人で遊ぶのは飽きたが、遊び相手が誰もいないのである。

今日は日曜日だと言うのに父親は朝から仕事で出かけてしまった。

「ママー、遊んでよー」

清一は母親のいる部屋に入った。

「ごめんね、清一。これが書き終わったらいっぱい遊んであげるから」

「ごめんね、清一君。お母さんの締め切りは明日なの」

と、眼鏡をかけた長髪の綺麗な女性に部屋を追い出されてしまう。小説家の母親はこのように部屋に籠り一日中出てこないことが月に一度ある。その時は必ず先ほどの女性が監視役として付いているのだ。

「じゃあお姉ちゃん一緒に遊ぼうよ」

清一が三角形の赤い積み木を女性に見せると、女性は困ったように微笑みながら。

「ごめんね、清一君。お姉ちゃんはお母さんを見守ってあげなければいけないから」

と部屋の扉を閉めた。

「チッチの散歩一緒に行けばよかったなー」

清一は、母親の部屋の扉を見ながら呟いた。一番の遊び相手であるチッチは祖母と一緒に散歩に出かけたばかりであった。

「そうだ、重ちー（しげ）の家へ行こう」

重ちーとは幼稚園での一番の仲良しの友達である。彼の家はこの家から清一の足で歩いて十分、途中大きな川を渡る。清一は青いリ

ボンの付いた麦藁帽子を被ると、外へと飛び出した。

真夏の太陽が街をそして清一を照らし続ける。しかし時おり強く吹く北風が適度な涼をもたらしてくれる。

清一が橋の真ん中を歩いていたその時、北風が突然激しく吹き、浅く被っていた清一の麦藁帽子を飛ばした。

「あっ、帽子が」

清一は麦藁帽子を捕まえようと橋の欄干から身を乗り出した。

瞬間、清一の体がくるりと鉄棒の前周りのように欄干の向こう側に――そして橋の下へと落ちた。

清一の体が川の中へと沈もうとしている。彼は右手に麦藁帽子を持ちながら左手で自分の体を浮かそうと一生懸命に水を掻いた。首を伸ばして口を水上に出そうとするもすぐに水の中に入ってしまう。

苦しい、清一が思ったその時、どこからか犬らしき鳴き声が聞こえてきた。

「チ……、チッチ……」

どこから来たのかチッチが清一の側まで泳いできたのだ。清一は無我夢中でチッチの背中に掴まった。そして顔を水上に出し思いっきり酸素を吸った。

一息ついたところで自分を運ぶチッチの背中を眺める。かつて庭で乗り回していた頃より小さくなった背中。その頭越しに見える川岸の光景には祖母の姿も見えた。

「飼い犬が溺れた子供を救う」というニュースは近所で評判となり、清一とチッチは地元の新聞に載ることになった。その写真には誇らしげにお座りをするチッチと、その背中に笑顔でまたがる清一の姿があった。

第四話

清一八歳　チッチ十一歳

「自転車に乗りたい」
夕食のハンバーグを食べながら清一が呟いた。
「自転車ならもう乗っているじゃないか」
父親が笑って応えると、清一は箸を持つ右手をテーブルに強く叩いて
「違う、補助輪がないやつに乗りたい」
清一のクラスの友達のほとんどが補助輪無しの自転車に乗れているというのに、清一は未だに補助輪つきの自転車である。
「重ちーだって普通に自転車乗れるんだよ。僕だって普通の自転車に乗りたいよ」
清一は力なくハンバーグを箸で切った。
「分かった、分かった。日曜日お父さんが補助輪を取ってあげるから、大川（おおかわ）公園で練習しなさい」
大川公園とは三年前清一が溺れた川の隣に面している公園である。
「あそこなら芝生が多いし、人も少ないから思う存分練習できるだろう」
その週の土曜日。大川公園の芝生広場に清一とその両親、そしてチッチの姿があった。
休日だというのに広場にいる人はまばらで、遠くの野球場から時折子供たちの叫び声が聞こえてくる。
「お父さん手を離すときは声をかけてね」
清一はハンドルを力強く握り締める。
「分かっているって、怪我はするなよ」
父親は軽く自転車の荷台に手を触れる。母親はその様子を左手にチッチを繋ぐリード、右手にフリスビーを持って微笑ましく眺めて

いる。
「よし清一、スタートだ」
父親の掛け声とともに清一はペダルを漕いだ。
最初はよろめいていたが三十メートル進んだ辺りで清一の体が安定しだした。それを見た父親は自転車の荷台から手を離す。
「ち、ちよっとお父さん手を離すの早……」
「早いよ」と言う前に清一は自転車にまたがったまま横倒しになった。
「清一、怪我はない？」
母親がチッチを連れて清一に駆け寄る。
「お父さん手を離すの早過ぎだよー」
清一は顔を上げて父親に抗議した。
「文句を言えるってことは大丈夫ってことだな」
父親は落ち着いた様子を見せながら自転車を立ち上げる。
「あなた。いきなり手を離すんじゃなくて、最初のうちは後ろに付いたまま走らせたほうがいいんじゃないかしら」
母親が清一の服に付いた泥を落とす。
「やっぱりそのほうが失敗も少なくてすむか」
それからしばらく清一は父親の支え付きで自転車を漕いだ。三十分ほどすると慣れたのか速く漕ぐことができるようになった。
「だいぶ速くなったじゃないか清一。この様子ならチッチと勝負できるかもよ」
息を切らせながら父親は笑顔で清一の肩を叩く。
「チッチと競走するの！？」
清一は目を輝かせながらチッチのほうを見る。チッチはそれまで寝そべっていたが、自分の名前を呼ばれたので、顔だけを起き上がらせて清一を見る。
「お母さんがフリスビーを投げる。チッチはそれを追って走るから、清一はそれに負けないように自転車を漕ぐんだ」
「分かった、やってみるよ。お父さん、チッチに勝つまで手を離し

ちゃダメだよ」
「分かっているって、しっかりと支えてやるから」
「チッチ、行くよ」
母親がチッチをリードから離し、フリスビーをチッチに見せる。チッチは尻尾を振り今にもそのフリスビーに食いつかんと立ち上がる。
「それっ！」
母親がフリスビーを遠くへ投げたのと同時に
「行くぞ、清一」
父親が清一の自転車を強く押した。清一もペダルを力強く踏みしめる。よろめきながらも清一の自転車は動き出した。やがて体は安定し、そのスピードは速まる。
「お父さん、手を離さないでよ」
清一の視線は空中のフリスビーを追うチッチの背中のみに注がれている。
「分かっているってしっかり支えているから」
フリスビーがゆっくりとその高さを落としていく。チッチはそれを空中で捕えようと腰を落とした。
「お父さん、このままじゃチッチが勝っちゃうよ」
清一はペダルを力いっぱい漕ぎながら叫んだ。
「大丈夫だってそのまま進めば勝てる」
父親の声がなぜか遠くから聞こえる。
その直後チッチは後ろ足で地面を蹴り、緑色のフリスビーを口に咥えた。チッチが着地したその横を清一の自転車が走りぬける。
清一はブレーキをかけて自転車を止めた。そして自分を支えていた父親の方を向く。
「お父さん、引き分けかな？」
しかし、自転車を支えていたはずの父親はいなかった。
「清一ー、お前よく一人でそこまで走れたなー」
遠くから父親の笑い声が聞こえる。見ると彼はいつ手を離したの

か、スタート地点にいる母親の隣で清一を眺めている。
「お父さん、手を離さないでって言ったじゃないか」
自転車を降りた清一は父親に向かって大声で叫ぶ。その前をチッチが通り過ぎていった。
この日から清一は補助輪無しの自転車に乗れるようになった。

第五話

清一十歳　チッチ十三歳

「チッチも年を取って大人しくなったみたいだねぇ」
夕食後のお茶をすすりながら祖母がポツリと呟いた。
「前は散歩のときいつも私が引っ張られていたけど、最近ではゆっくりと私の横を歩くようになったんだよ」
「チッチが母さんに合わせて歩くようになったんじゃないのかな」
父親がスポーツ新聞を眺めながら答える。
「でもあなた、チッチはもう十三歳。人間の年で言ったらお爺ちゃんよ」
台所から母親の声と皿がぶつかり合う音が聞こえてくる。
「うそ！？　チッチもうお爺ちゃんなの？」
テレビアニメを見ていた清一が驚きの声を上げた。
「犬と人間は年の取り方が違うからね。清ちゃんは十三年経ったら中学生だけど、チッチはお爺ちゃんになっちゃうんだよ」
祖母が優しく清一の頭を撫でた。
「そんなぁ、信じられないよ」
清一は、自分がチッチの散歩をすることでそれを確かめてみることにした。

「チッチ、今日は久しぶりに僕が散歩の相手だ」
麦藁帽子を被った清一がチッチにリードを見せる。チッチは目を輝かせて尻尾を振りながら清一に飛びついた。しかし昨日の祖母の言葉が引っかかるのか、若干チッチの喜び様が以前より弱くなったように見える。
「今日はチッチの歩きたいところを歩いていいからな」
リードをチッチの首輪につなげると、清一はチッチに動くようリ

ードを上下に振った。チッチはゆっくりと動き出す。
「チッチ、散歩だけどもっと速く歩いていいんだからな」
最初はチッチの後ろを歩いていた清一だったが、すぐにチッチに追いついてしまった。そして清一がチッチに合わせてゆっくりと歩くようになってしまった。
「チッチ、今日は暑いから走りたくないのか」
「そうだ」とでも言いたいのかチッチは立ち止まって清一の顔を見た。真夏の暑い光が清一とチッチを照らす。アブラゼミとツクツクボウシの輪唱がさらに暑さを感じさせる。
「分かったよ、チッチ。今日はゆっくり歩こう」
そう言いながら清一がリードを揺らすとチッチは再びゆっくりと歩き出した。その背中が清一には小さく見えた。
歩く速度が遅かったこともあるが清一がチッチを気遣い（自分のためでもあるが）日陰を選んで歩いたためもあり、散歩の時間は以前清一が散歩をしたときよりも倍以上のものとなった。
そのため清一とチッチが家に付いたとき、日は西に傾き、辺りの音はアブラゼミとツクツクボウシに変わってヒグラシが主役になっていた。
「お帰りなさい、清一。夕ご飯もうすぐできるからね」
母親がドックフードの袋を抱えながら清一を迎えた。その袋に「老犬用」という文字が書かれていたのを清一は見逃さなかった。

最終話

清一十二歳　チッチ十五歳

「チッチ、チッチ」

清一がチッチを呼んで手を近づけると、チッチは臭いで清一の手を探り、鼻に清一の指が当ったのを確認するとペロペロと舐めだした。

「お母さん、チッチの目が見えないって本当なの？」

チッチの頭を撫でながら清一は隣に座る母親に尋ねた。

「ええ、お医者さんがそう言っていたわ。さらに胃腸が弱くなっているんですって」

母親の視線の先にはチッチが大量に残したドックフードと茶色に染まった枯葉の固まり。

「ご飯も胃腸に優しいものに変えないといけないわね」

「それならお母さん、お粥をつくろうよ」

「お粥か……、確かに胃に優しいけど、チッチが火傷しちゃうわよ」

母親が清一の頭を優しく撫でると清一は反論した。

「じゃあ冷たいお粥をチッチのために作ろう」

その日から清一はチッチのためにお粥を作った。普通に作ったお粥を冷蔵庫に入れて冷やし、程よい温度になったところでチッチに与える。

最初は訝しそうに臭いをかぐだけであったが、清一の思いが通じたのか、チッチは少しずつそのお粥を食べるようになった。食べる量と比例してチッチの元気が心なしか戻ってきたようにも見えた。

年が明け二月に入ったある日のこと――。その日は朝から風雨が激しく清一の町を襲った。夜になっても弱まることを知らず、さらにその強みを増していく。

窓を叩きつける雨粒を見て祖母が呟いた。

「これじゃあチッチの家にも雨がいっぱい入っているかもねぇ」
テレビアニメを見ながらそれを聞いた清一は、テレビを消すと
「お母さん、このままじゃチッチが風邪をひいちゃうよ。せっかく元気を取り戻したのに風邪をひいたらまた元気がなくなっちゃうよ」
「そうね、チッチを玄関に入れないとチッチが可哀想だわ」
母親と清一は合羽を着ると庭へと出た。外には冷たい風が吹きすさび、頬に当る雨粒には氷が混じっている。
「チッチ、迎えに来たよ。お家に入ろう」
清一の声を聞いたチッチが犬小屋から顔を出した。全身が小刻みに震えている。
「チッチ、寒かっただろう。家に入ったらあったかくしてやるからな」
清一は首輪に付いた紐を外すと、首輪を掴んでチッチを玄関へと誘導した。チッチはゆっくりと清一の隣を歩く。
家の中に入ったものの、チッチには自分の体に付いた水滴を飛ばす元気がなかった。チッチの全身の毛先から水滴が垂れ落ちる。
「チッチ、体拭いてあげるね」
母親は白いタオルをチッチの全身にかける。そして優しく叩くことで乾いたタオルにチッチに付いた水滴を染み込ませる。
「お母さん、僕も手伝うよ」
清一がタオル越しにチッチの体に触れる。その体は以前よりも細くなったように感じられた。
「清一はチッチのベッドを作って。風呂場にまだタオルいっぱいあるから」
「うん、分かった」
清一は風呂場へ走り様々な色のタオルを十枚ほど持ってきた。それらで丸まったチッチより一回り大きな円を作る。
「チッチ、お前のためにベッドを作ったからな。今日はこの中に入って寝るんだぞ」
清一の言葉を聞いたチッチは、鼻でタオルの位置を探るとその中

心に入り丸くなった。
「よかったな、チッチ。これでもう寒くないよ」
清一がチッチの頭を撫でると、チッチは目を瞑り小さく鼻を鳴らした。冷たい雨に打たれて冷えたチッチの体の奥にほのかなぬくもりを感じた。

翌朝清一は母親の声で目を覚ました。
「清一、玄関に来て」
眠い目をこすりながら玄関に向かうと、父親と祖母がすでにそこにいた。二人の視線は玄関に寝ているチッチに注がれている。
「お母さん、お父さん、お祖母ちゃん、チッチがどうかしたの？」
清一が尋ねるが誰も答えようとしない。
「チッチ、どうした寒いのか」
清一がチッチの側へと駆け寄り頭を撫でる。冷たい――。昨夜も冷たかったけど、その時とは違う――。と清一は感じた。
「おい、チッチ寒いのか？　寒かったら返事をしろ」
清一はチッチの冷たい頬をつねった。チッチはそれに対して何の反応も示さない。
「清一ー」
父親がやっと口を開いた。
「チッチはもう起きないんだ」
「起きないってどういうこと？」
「チッチは死んでしまったんだ」

チッチの葬儀が終った後でも清一には「チッチの死」が信じられなかった。学校の国語や道徳の授業で聞いたことはあるが生まれて初めて目の当たりにした「生命の死」――。
「ねえ、チッチはどこに行ったの？　チッチが死んだってどういうこと？」
「清一、チッチは天国に行ったのよ」

「天国ってどこ？　お母さん」
「天国は……、空の上の世界よ」
「チッチにはもう会えないの？」
「また……いつか会えるわよ、きっと」
そう言うと母親は自分の仕事部屋へと逃げてしまった。母親の答えに清一は満足いかなかった。
「清ちゃん、こっちへ来なさい」
その時、祖母が清一を自分の部屋へと呼んだ。
「お婆ちゃん、お婆ちゃんならチッチがどこに行ったか分かるの？」
清一が尋ねると、祖母は笑顔で頷いた。
「ええ、分かるわ。お婆ちゃんの膝の上に座りなさい」
清一は言うとおりにした。すると視線の先に大きな仏壇と数枚の白黒写真が入ってきた。ただし一枚だけカラーの写真があった。それはチッチの写真だった。
「チッチはね、ここにいるのよ。清ちゃんのお爺ちゃん、私のお父さん、お母さんと同じようにこの仏壇の中にいるの。ここから清ちゃんのことを見守ってくれるのよ」
「見守る？」
「そう、清ちゃんが無事で元気に暮らせるように見守ってくれるの。チッチの体は清ちゃんから見えなくなっちゃったけど、その代わり清ちゃんを守ってくれる力を手に入れたのよ」
「チッチは前からずっと僕のことを守ってくれたよ」
確かに清一はチッチから守られ続けてきた。清一の疑問は当然である。
その疑問にも祖母は怯まずに答えた。
「そうね、清ちゃんの言うとおりね。だけどチッチは年を取るに連れて体が弱くなって清ちゃんを守ることができなくなってしまったの。だからチッチは清ちゃんのお爺ちゃんと一緒にずっと清ちゃんのことを守る力を手に入れたのよ。もう今度は年を取ることもなければ弱くなることも無いわ。ずっとずーっと清ちゃんを守り続ける

のよ」
「チッチがずっと僕を守り続けるのか……」
清一はチッチの写真を撫でるとこう呟いた。
「チッチ、これからもよろしくな」

春になり、清一は中学生になった。これから自転車で毎日中学校へ通うことになる。その自転車は、かつてチッチの犬小屋があったところに置かれていた。
毎朝自転車にまたがるたびにチッチのたくましい背中が清一の脳裏に浮かぶ、そのたびに清一は心の中で呟いた。
「チッチ、行ってくるよ」
桜の花びらが舞う中、清一は自転車を漕ぎ始めた。その後姿をチッチが尻尾を振りながら見つめている。

最終話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
作者自身は犬を飼った経験はありませんが、小学三年から六年間住んでいた家の隣家に飼われていた犬とはまるで自分の飼い犬のように可愛がらせてもらいました。
今回はその思い出をちょっぴり混ぜて書いてみました。
読んでいただきありがとうございました。
また別の作品でお会いしましょう。ではでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2138e/

チッチの背中に乗って

2010年10月8日15時31分発行